農商工連携事業とJA氷見市の役割

JA氷見市 総合企画部長　田上政輝

平成20年、農林水産省と経済産業省が両省の垣根を越え、農林漁業者と商工業者などがお互いの「技術」や「ノウハウ」を持ち寄り、新しい商品やサービスの開発・提供、販路の拡大などに取り組む創意工夫を発揮した「農商工連携事業」が全国各地で始まり、JA氷見市の「ハトムギ事業」がその第一号案件として採択されました。

氷見市でのハトムギの栽培は昭和60年代から一部の中山間地で高齢者の生産農家が米の転作作物として細々と栽培していましたが、転機となったのはJA氷見市が約３年前に「ペットボトル茶」を発売したことでした。食味や風味の良さはもちろんのこと、市場価格を大きく上回るハトムギの買い付けによる生産農家の利益を十分確保できる施策や１本の販売につき５円を氷見市に寄付したこともあり、氷見市内での収穫高は平成20年には全国生産量の約10％強にも達する拡大を見せ、「はとむぎペットボトル茶」は平成18年には13万本、平成19年は55万本、そして昨年は150万本の売上に急拡大をしました。

さらに、こうしたハトムギを他主要産地との差別化を図るため「産学官」の連携が必要と判断し、１年半程前から金沢大学医学部・薬学部、富山大学等との共同研究を始めました。ハトムギは中国では古来より漢方薬として、日本においても美肌のお供として様々な分野で利用されていますが、これを医学的・薬学的な証明、啓蒙活動そして高機能商品の共同開発という業務提携をする一方で、全国ベースで学術的な研究や関係者間の交流を目的とした「ハトムギ臨床応用研究会」を立ち上げました。そしてこの様な「学」との連携の成果として昨秋、農商工連携事業「はとむぎ茶ゴールド（仮称）の開発」が全国第一号案件として、さらにハトムギ焙煎茶事業が「地域ブランド化支援事業」として経済産業省や農林水産省に認定され、我々のハトムギ事業が名実ともに「産学官の事業」になりました。

JA氷見市の川上組合長は「今、農への回帰が叫ばれている。しかし簡単にはその風を掴むことはできない。地域の活性化のため、農業だけでは解決しない。行政、商工、観光、漁業等「オール氷見」の連携が必要だ。氷見市が元気の出る行動をまずJA氷見市がしよう。」前述の氷見市への寄付やハトムギの高い買い付け、JA職員に地元でのみ使用可能な飲食券の発行など、最近ではハトムギ関連の視察や情報収集に全国各地から行政、JA関係者、報道関係者がJA氷見市を訪ねてくれますが、その受け入れ条件は「氷見市内で食事をするか宿泊をするか」です。

JAとして「農家の繁栄」を基本経営方針にすることは当然ですが、こうした「地元の繁栄」に結びつく取組こそが今のJA氷見市の役割であり、これこそが「農商工連携事業」の成功につながる第一歩と確信している所であります。

（たがみ　まさき）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。